医療機関との連携により，学習への意欲をもち始めた学習障害（LD）児の事例

キーワード：学習障害（LD）とは　医療機関との連携　二次的障害を防ぐ

この事例では、学習障害（LD と略記）の疑いがある児童に対して、医療機関との連携を進めながら校内体制を整えて行った指導・援助に焦点を当てまとめてみました。

問題の概要

Ｃ男は、低学年の頃から、それぞれの学年で、担任のきめ細かい指導や周りの友達のサポートにより、ある程度学習に参加することはできていた。しかし、学年が上がるに従い、学習面及び生活面での困難な状況が数多く見られるようになってきていた。そのため、学習意欲が著しく低下して無気力になってしまっていた。励ましながら指導しようとしても、Ｃ男は、「やってもできない」、「みんな僕のことを馬鹿だと思っている」とあきらめの言動を繰り返していた。

対応の概要

1　Ｃ男の学習環境を整える

担任は、Ｃ男の学習上の困難な状況を改善するために、個別指導を行ったり、反復練習を繰り返したりした。すると、計算力が向上する等の成果が見られると同時に、いくら練習しても音読ができない、なかなか漢字が覚えられない等、本人の努力だけでは適応しにくい状態であることが明らかになってきた。何らかの発達上のかたよりがあるのではないかと考え、ＬＤ児のスクリーニングテストを行うと、ＬＤが疑われるという結果が出た。そこで、保護者面談で話題にし、専門機関への相談を勧めた。保護者もＣ男の学習や生活の状態に不安感を募らせていたので、医療機関を受診し、医学的な診断を受けることに同意してくれた。

医療機関は担任が紹介し、受診の際は学校からＣ男の学習や生活の様子を伝える文書を持参した。

2　支援のヒント

数回の受診の後、担任が医療機関を訪れ、診断結果並びに支援のヒントを助言いただいた。「読字障害」及び「書字障害」との診断を受け、まず、漢字を読めるようにすることを最優先にし、読めない漢字にはふりがなをふり、読むことに対する抵抗感を少なくすることを助言された。

3　校内体制による指導・援助

特別支援教育校内委員会の場で指導・援助の方針を検討した。Ｃ男の学習環境を整えるため、担任だけでなく、担任外や特別支援教育のサポート教員にも協力してもらえる体制を整えることにし、以下のような方針を立てた。

① 教科書、テスト等にはできる限りふりがなをふる。（担任外・サポート教員）

② 朝活動の時間を活用して、音読のトレーニングを行う。（サポート教員）

その結果、読むことに対する抵抗感が少なくなったＣ男は、少しずつ学習に取り組むことができるようになったり、音読の練習に熱心に取り組んだりすることができるようになってきた。そして、「僕も、友達のように勉強ができるようになりたい」と学習に対する意欲がもてるようになってきた。

実践のポイント

★Ｃ男のかかえる問題状況をそのままにせず，保護者と連携しながら医療機関につなげ指導・援助の方針を明らかにすることができた。

★学習しやすい環境を整えることにより，Ｃ男の学習に対する抵抗感が軽減され，少しずつ成果が上がってきた。

★学習に対して無気力になり，低下していたＣ男の自己肯定感を高めることができ，二次的障がいを防ぐことができた。